

[COMMUNION]

WEB:<http://www.nskk.org/tokyo/index.html>
E-mail:comm.tko@nskkn.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678
Diocese Office



第37号
(通巻1272号)
2017年6月4日
編集：広報委員会
委員長：渡辺康弘
日本聖公会東京教区
港区芝公園 3-6-18



環状グループ 筍掘り



山手グループ グリーンデイピクニック



4月29日 春の野外活動 フォトアルバム



下町グループ ファミリーピクニック



多摩グループ バーベキュー

特集 信仰はどうつながったか 信仰の継承を考える

聖公会はキリスト教の中では歴史のある教派に属します。したがって代々続く家庭も少なくありません。ただ、今はなかなか子どもたちに信仰を継承することは難しく、どこの家庭も苦勞しているのではないのでしょうか。今回、3世以上のクリスチャン（10名）の方にお願いしてアンケートに答えていただき、信仰がどのように繋がったのかを考えてみたいと思います。



（質問項目）
Q1…自分がクリスチャンであるということに気付いたのはいつでしょうか
Q2…クリスチャンの祖父母（それ以上）の思い出として印象に残っていることはありますか

Q3…ボーンクリスチャンとしての悩みはありましたか
Q4…教会に行かなくなった時期はありましたか、また戻ってきたきっかけは何でしたか
Q5…今、クリスチャンの家庭に生まれたことをどう思っていますか

●A1…幼児の頃から家には十字架や本棚には聖書があり、キリスト教になじんでいたが、認識したのは中学の絵の授業で自画像にサインを記入するとき父親からミドルネームを入れた方が良くアドバイスされ初めて洗礼名が有ることに気付いた。

●A2…祖父は私が生まれたときはすでに亡くなっており、祖母とも離れて住んでいたの思い出として印象に残っているのは有りません。ただ幼稚園児の時に両親と何度か日曜日の礼拝に一緒に行った事は印象に残っている。

●A3…悩みは有りません。むしろ親に感謝しています。結婚を機に再度教会に行くようになった。

●A4…大学生から遠のいた。結婚を機に再度教会に行くようになった。

●A5…クリスチャンの家庭に生まれて良かったと思っっている。人生に於いてしっかりと一つ一つの宗教を持つ事は必要なことだと思う。自分はキリスト教で感謝と奉仕の精神を学んだ。

●A1…特に気が付いた覚えはありませんが、生活の中に祈りがあり、聖書の教えがいつの間にか身に付いていることに気が付いた覚えがあります。

●A2…幼稚園の手紙で日曜日に礼拝をしている事を知り、祖母に連れられて教会の門をくぐりました。祖母はそれから生涯教会生活を送っていました。特に教会に行けと言われてたことはありませんでしたが、没後、

教会の方からわたくしが教会生活を送ることを心から望んでいた事を聞かされました。

●A3…曾祖父が牧師をしていた事。親戚に牧師がいる事を聞き、祖母の兄弟の葬儀で親族が集まると、皆クリスチャンであることに曾祖父の教えが孫子の代まで伝わっている事に、ボーンクリスチャンであることに気付かされました。

●A4…日常の生活に追われて、行かなくなった時は教会生活からどんどん離れてしまいました。

●A5…キリスト教の教えを謙虚に受け入れ、人を敬う事。人が恨まない事。自分が生かされている事に感謝出来る事に喜びに思っています。

●A1…小学生の時。教会とのつながりを意識し始めたのは堅信（中一）の後、礼拝奉仕を通じて。

●A2…教会に連れていってもらった。特にイースター、バザー、クリスマスの時に。

●A3…残念ながら祖母は教団の信者だったので、そうたびたび一緒に教会へ行くことはありませんでした。曾祖父は幕末に医学とともにオランダの方からキリスト教を学び娘である祖母を連れて行ったそうです。祖母にしてみれば、大好きなオルガンで歌を歌えることが楽しかったのでしょう。今でも母と話すのですが、自由でマイペースの祖母ではありましたが、本当に「平等」の精神を持った人だったように思います。

●A4…その頃、教会へ行くことは私にとって何だったのだろう。あらためて考えると、こんなところが幼児受洗の私の弱さだったかと。ほぼ毎週日曜日に入る仕事を断らなかつた日々があります。

●A5…他の宗教や宗派を深く知らないで、もちろん比べることはできませんが、ひとつ生まれた時から、生まれる前から与えられたことは大変幸せに感じます。それがキリスト教であったことで「感



●A1…小学生の低学年の頃

●A2…祖母が讃美歌を歌っていました。

●A3…特に悩みはありませんが、日本人の中ではマイノリティーなのか、と思うことがあります。

●A4…学生時代や社会人になって疎遠な時もありましたが、東日本大震災のボランティア活動に少し参加したことが戻るきっかけになりました。

●A5…家族で共通の話題があるという事はラッキーなことだと思います。



謝「平等」を無理なく芯におけることが、あらためて幸せに感じるものだと思います。

●A1…小学生の低学年の頃

●A2…祖母が讃美歌を歌っていました

●A3…特に悩みはありませんが、日本人の中ではマイノリティーなのか、と思うことがあります。

●A4…学生時代や社会人になって疎遠な時もありましたが、東日本大震災のボランティア活動に少し参加したことが戻るきっかけになりました。

●A5…家族で共通の話題があるという事はラッキーなことだと思います。

●A1…小学校の友人のお家は仏教や他の宗教であるということを知り、他の宗教があるということを知ったときだと思います。

●A2…祖父の家に遊びに行き、帰る際は頭を手をおかれ、お祈りしてもらっていました。

●A3…キリスト教や聖書に興味・関心を持たないまま、成長してしまっただけで、詳しいことがわからない。キリスト教についてクリスチャンではない友人に聞かれてもちゃんと答えることが出来ない。なぜ、教会に行くのかわからなくなることもある。

●A4…何年も教会に行かなくなる、ということはありませんでしたが、今でも、行ったり行かなかったりです。それでも教会に行くのは、他の方の祈る姿を見て、学ぼうと思っっているということが理由の一つです。



●A5…クリスチャンの家庭に生まれたことは、普段から意識して過ごしていることはありません。

●A1…幼少時の日記帳に「今日は教会へ行きました」「教会のキャンプで」などの記述が実に多かったこと、日曜に学校の友達とは遊べなかつたこと、ふと気が付くと、何やらカタカナの名前（クリスチャンネーム）が記されたカードのやり取りが行われていたこと、お部屋に十字架が置かれていたこと。などで

ちは信仰について話すよう勧められたからだ。
A2…祖父が司祭であったことはよく知っていた。そしてそのことをとても誇りに感じていた。

A4…教会から離れたことはないが、毎週通って教会に深く関与することが困難になった時期はあった。その頃は教会は最優先事項ではなくなった。気付かないうちに神と疎遠になっていったが、神は私が戻ることを望んでいる、と実感し、それが再び教会との関わりに戻るきっかけとなった。そして定期的に教会の門を通るようにしてくれたのは、聖歌隊で歌おう、という神が与えてくれたインスピレーションだった。また、教会の平日の祈り、特に朝の祈りに定期的に参加することによって、教会とのつながりは再び深いものとなった。朝の祈りに参加し始めたのは、初めは毎朝司式をしてくれる牧師の厚意に謝意を表すためだったが、次第に1日の始め方として本当に良い方法だということがわかり、数ヶ月後には主に完全に心をつかまれてしまった。



A1…その昔、クリスチャンでない私の母方祖母の葬儀に連れられた時。
A2…そもそも、明治期に洗礼を受けた父の祖母が、孫達皆に幼児洗礼を授けさせたのが始まりなのですが、孫である父は五男であり、私自身が物心ついた時には祖父(父の親)しかおらず、その祖父も程なく亡くなってしまったので殆ど記憶がありません。
A3…悩みと言うか、日曜日は寝坊したいのに何で叩き起こされて、朝から教会に行かなくてはならないのかとか、他の家庭では遊園地行ったりするのになぜ毎日曜日ごとに教会なの？と言う疑問がいつもありました。祈禱書は意味不明だし、立ったり座ったり跪(ひざまず)いたり忙しいし、説教は退屈だしと、まあひどい子供でした。それと、自分で信仰に目覚めたり、何か故あって教会の門を叩いたのであります。ありませんので、そう言った方々と中々共感が出来ない悩みは現在も有ります。また、他者からの先入観で「クリスチャンなのだから品行方正なでしょ。」と

言った見方をされる事も有りました。当然もつと自由でありたいと言う反発も有りました。
A4…中学生くらいまではサーバーなどの奉仕があったので行っていましたが、高校生位から日曜日の寝坊が一番の安らぎになって、教会には行ったり行かなかったりし、学生時代は家にも寄り付かなくなって、殆ど行った記憶がありません。
その後結婚を機に通うようになり、新しく就任した若い牧師の頃にはサーバー、そして信徒奉仕者を任せられたりして、毎日曜日行くようになりました。時が経ち、他の信徒から信徒奉仕者が一目置かれるような存在(勝手にそう感じていたのかもしれない)ですが、当時はまだその制度が始まったばかりなので)となっていく様に感じ、段々と負担に感じる様になっていきました。同時に教会委員の仕事も負担となっていました。
そのころ個人的問題が生じ、一旦教会との交わりを切ろうと決心しました。それが、戻るきっかけとなったのは、教会建築と言う仕事に係るよう要請してくれた、当時の司祭や一部教会委員のお蔭と言えらるでしょう。
A5…幼い頃、夜に天から、髪の毛のない白人のおじさんが光と共に降りてくる、夢とも現実ともつかない体験があったのですが、そ

の後おっさんはにこにこ笑いながらスーッと何も言わずに天に帰って行ってしまいました。その時彼は、何やら自分と天と繋ぐ紐のような物を置いていきました。まあこれらは単に夢想なのでしょうが、不思議な事にこの繋がりは今でもずっと感じています。見られている、守られている実感、これも幼児洗礼のお蔭でしょうか？いやわかりません。
自分で門叩いていないボーンクリスチャンのせいなのか、教会の祈りの中で自分の内側への祈りより、代祈がより素晴らしいと感じています。他者の為(十分ではありませんが)は一つの信仰の神髄と思っています。全てではないですが、廻りを見るとボーンクリスチャンにはこの傾向がある気がします。



アンケートを読んで感じることは、みんな自然とキリスト教を受け入れ、感謝しているということ。しかしキリスト教の家庭に生まれたというのは、1つのきっかけにすぎない。信仰の継承は、親の責任というより、教会の課題であり、大切なのは、その人本人をどう教会が受け入れたかではないだろうか。

シリーズ woman's ②

力を合わせて

松村豊

このたび、定年を迎えられた総主事 鈴木裕二司祭の後任を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

6年後の2023年、教区成立100年を迎えます。これまでに多くの信仰の先輩方が、その時々における課題を乗り越え教区の平安と進歩に尽力されたように、今度は、私たちが将来の信徒を思い、決断し行動する番です。

ご存じのように、今、教区は大きな課題に直面しています。聖職の圧倒的な不足、信徒の漸減や高齢化とこれに伴う財政難、老朽の教会建物や無住の牧師館の維持などです。また、社会では超高齢化のみならず、一昔前と今とは特に若年層や女性の働き方に大きな変化が見られます。ゆとりがない社会に皆、不安や忙しさを感じています。これ



ら相俟って、教会生活の諸活動を昔と同じように行うのが難しくなってきたことを実感します。

それぞれの教会は信仰で紡いだ尊い歴史と豊かな特性を持っていますが、一方、10年30年先を具体的に思い描くことが出来ずにいます。この先2年間で6名の司祭が定年退職を迎え、現実是一段と厳しくなります。

まるで危急存亡の秋のように感じます。私たちは、以前であれば出来得たであろう事を当然視するのではなく、一人ひとり、そして教会が情勢の変化をどう考え対応したらいいのか。また、教会共同体である教区は、総体として何を優先していくのか。確認して進まなければならないと思います。

ところで、必ず来ると云われる首都直下地震も不安

「司祭の心」

「出会う」といつと

竹内敏晴著 藤原書店 2009年刊 執事 太田 信三

「出会う」ということは、いくつかの層があるようです。聖書を例にするならば：イエス様は日々出かけていって多くの人と出会いますが、ある人は単なるユダヤ人の男のひとりとしてイエスと出会います。しかしある人は、来るべきメシアとして「主」イエスと出会います。同じ「出会い」でも、そこには違いがある。その違いはどうして起こるのでしょいか。



四福音書はいずれもイエス様の昇天から数十年後に書かれました。福音記者たちは、直接イエス様と会ったことがないばかりか、ルカ、ヨハネと後代になればなるほど、イエス様に関する直接的な情報は減ったこと

です。被災した自分とどう向き合い、再び立ち上がるか。冷静で居られる今のうちに考えてみようかと昨年から各教会での話し合いを始めています。「自分」や「信仰の家である教会」とは何なのか、また、普段あまり意識しない「地域と教会」はどうあるのか。原点を考えさせられます。
数々の課題への対処は一朝一夕には出来ません。しかし、ピンチはチャンスとも云われます。苦しい時、常に神さまが居てくださる。話し合える力、決めることの出来る力によって多様な意見や思いが交わされ、祈りのうちにあって教会教区が整えられていくことを信じます。教区事務所は、決定されたことを遂行し円滑に運営できるように諸教会との意思疎通に一層努める所存です。全ての聖職と信徒に、将来の信徒に思いを致す愛と知恵と勇気が与えられますよう祈ります。
(東京教区教区事務所 総主事)

とでしよう。しかし不思議なことに、どの福音書にもイエス様との出会いの物語が実に生き生きと記されています。それは、主イエス昇天後数十年の時を経てなお、多くの人が主イエスと「出会う」という経験をしたからではないでしょうか。その出会いの喜びを伝えたくて、福音書は記されたに違いありません。それゆえ福音書は、2000年後を生きるわたしたちにも、「あなたたちも主イエスと出会うことができますよ!」ということを語り続けます。
主イエスとわたしたちは今なお出会うことができます。この不思議なことがどうして起こり得るのか、または、どうして起こらないのか。さらに、主イエスのように、他者と真に出会うには…。
本書を読み、著者竹内敏晴さんとまるで出会ってお話ししているかのような気持ちになりながら、このようなことを考えさせられました。

私たちの教会 [27]

ようこそ東京聖テモテ教会へ



秋のバザー



クリスマス礼拝



ステンドグラスから零れる光

秋のバザー、クリスマス礼拝、ステンドグラスから零れる光、ヨニークな活動として、日礼拝聖餐式をホームページ上で動画配信を続けており、その他年6回のランチタイム・オルガンコンサートやテモテ・バザーの収益金でアジアからの留学生に奨学金をクリスマス時期

東京聖テモテ教会では、2003年の創立100周年を機に、パイプオルガンの導入、聖堂を含む耐震及びリフォーム工事を、「美しい礼拝」の確立等、皆さんが集う教会の場所としての整備につとめ、現在は牧師館内装の大幅リフォーム工事を実施しています。一方、新来者や高齢の方への礼拝式文・聖歌のファイリングサービス、アマキスの活動を始めました。当教会も信徒の高齢化と若年層の減少への対策が課題となっていますが、日曜学校の礼拝は子どもたちが来ない主日も大人で礼拝を守り、「こどもと祝う主の食卓」礼拝も最近改訂された式文で月1回（5月と11月は主日礼拝として）実施しています。



ヨニークな活動として、日礼拝聖餐式をホームページ上で動画配信を続けており、その他年6回のランチタイム・オルガンコンサートやテモテ・バザーの収益金でアジアからの留学生に奨学金をクリスマス時期

ヨニークな活動として、日礼拝聖餐式をホームページ上で動画配信を続けており、その他年6回のランチタイム・オルガンコンサートやテモテ・バザーの収益金でアジアからの留学生に奨学金をクリスマス時期

ヨニークな活動として、日礼拝聖餐式をホームページ上で動画配信を続けており、その他年6回のランチタイム・オルガンコンサートやテモテ・バザーの収益金でアジアからの留学生に奨学金をクリスマス時期

ヨニークな活動として、日礼拝聖餐式をホームページ上で動画配信を続けており、その他年6回のランチタイム・オルガンコンサートやテモテ・バザーの収益金でアジアからの留学生に奨学金をクリスマス時期

シリーズ 宣教への取り組み②

ロンドンの下町ミニストリー (後編)

中島 郁代

前回に続き、オルガンの学びのため訪れたロンドンで礼拝に出席し見聞きしたこと感じたこと、今回は都心部北東ホクストン地区にある2つの教会を紹介いたします。滞在費節約のため、夏休み貸しをして、美術大学の寮に落ち着きました。ホームレスの多い治安の悪い地区とガイドブックには書かれていますが、私の所属する千住基督教会も同じような立地です。むしろ親しみを感ずりました。



礼拝

●ホクストン聖ヨハネ教会 (1826年創立)

寮の筋向かい、通りから見渡せる公園のような広い敷地があり、教会裏手に小学校が併設されている。前回取り上げたシャドウエル聖パウロと同じく、主日聖



寮の筋向かい、通りから見渡せる公園のような広い敷地があり、教会裏手に小学校が併設されている。前回取り上げたシャドウエル聖パウロと同じく、主日聖

寮の筋向かい、通りから見渡せる公園のような広い敷地があり、教会裏手に小学校が併設されている。前回取り上げたシャドウエル聖パウロと同じく、主日聖

寮の筋向かい、通りから見渡せる公園のような広い敷地があり、教会裏手に小学校が併設されている。前回取り上げたシャドウエル聖パウロと同じく、主日聖

寮の筋向かい、通りから見渡せる公園のような広い敷地があり、教会裏手に小学校が併設されている。前回取り上げたシャドウエル聖パウロと同じく、主日聖

餐式は音楽牧師とバンドによるコンサート型。会衆は70人前後、近隣に住むアフリカ系やアジア系の若いファミリー、若者から高齢者まで幅広い構成だった。

物のテーブル、間接照明をセットして、地元音楽家による演奏を聴き、黙想する形の集会であった。

●ホクストン聖アンナ教会 (1870年創立)

そこから寮を挟んで反対方向にしばらく歩くと、住宅街の中に石造りの教会が見えてくる。入口の案内看板に Parish Mass と書いてあることから、典礼を重視するハイチャーチであることがうかがえる。日曜11時の聖餐式、受付で週報と祈祷書、聖歌集を受け取って席に着く、という当たり前の流れがロンドンでは新鮮。聖堂のあちこちに美しいろうそくが灯され、小学生の子どもたちもサーバーとして加わるプロセッション。専任オルガニストによるパイプオルガン演奏、聖歌隊もあつた。礼拝後には中学生ぐらゐの男の子たちがごく簡単な茶菓サービスを担当していた。その日の会衆は40人ほど、平日も朝夕の

礼拝、早朝もしくは昼の聖餐式のいずれかが必ず行われており、祈りを捧げたい人のために開かれている。



信徒や小学校の保護者たちなど動ける人手が豊富なので、かれらが聖アンナに向いて働くのである。庭でミニバザーを開いて資金集めもしている。近隣でそれぞれ特色ある礼拝を分担して客層を住み分けつつ、単独でできないことは協力して行う。根っこの考え方さえ同じなら、違いは多様性にとらえ、共存していけるーそんな姿勢に聖公会らしさを感じた。

礼拝のカラーが全く違うこの2つの教会、どちらも英国教会(聖公会)ロンドン教区のパリスシユである。聞いてみると決して「あつちの礼拝はおかしい」などと反目しているわけではなさそうで、礼拝以外の活動は一緒にしているらしい。例えば、大きな一戸建ての信徒会館を持つ聖アンナでは、土曜夜に困窮者向けの食堂「スーパークITCHEN」を開く。しかし聖アンナだけで毎週継続するほどには人手がない。一方、聖ヨハネには会館も広い台所もないが、若い

《信徒リレーエッセイ》

イースターの出来事

三光教会 大越 保正

晴天の中、三光教会では満開の桜の下でイースターを祝う愛餐会が行われました。満たされた気持ちで迎えた次の日の朝、強風によりその桜の幹の1本が倒れました。もとは幹回りが各々1m余もある太い3本の幹からなる株立ちの桜でしたが、老朽化の為に既に1本は数年前に切倒し、今回の風で2本目も倒れ、残りは1本です。倒れた幹は大きく広げた枝一杯に無数の花をつけ今年も私達を楽しませてくれましたが、根の部分は腐食が進んでおり、満開のまま倒れた姿は痛ましく、よくぞイースターまで頑張ってくれたと神に感謝しております。残りの1本も老朽化が進んでおり、もう時間の問題でしょう。いくら幹や枝葉が元気であっても3本の幹を支える根の部分が腐ってはいはその躯体は滅びるという事を、この桜の木が身をもって教えてくれたような気がします。

エリアに分かれて東京教区の根元は大丈夫でしょうか？

総勢33名！ ナイトクルー
ルーピング開催
新田 紗世

ナイトクルーは、青少年世代の連携を目的としてはじまりました。今回は、SSネットワークにもご協力頂き、参加者は春から中学生となる小学6年生から35歳まで、総勢33名となりました。普段は、それぞれで活動している3つの会ですが、ナイトクルーリングでは、各世代が顔を合わせ、お互いを知り「ここを卒業したら、あそこへ行けるんだ！」と想ってもらえる機会になればと考えています。



たらの、朝の祈りをお捧げし、日の出を見てから、月島聖公会に戻り、解散となります。式文もよく見えないうちから、だんだんと明るくなつて、ついに日の出！の瞬間はみんなわくわくです。たった半日ちよつ

とのプログラムですが、みんなの出会い、楽しむ力に助けられ、とても充実した時間になりました。

(浅草聖ヨハネ教会信徒)



世界の聖公会
ニュース⑤
イラクからの
難民、カナダ
聖公会司祭に
アユーブ・

プログラムの、まずはレクリエーション、その後みんなで夕食のカレーを作って食べ、銭湯へ行き、夜10時には完全消灯。朝の3時に起きて、朝日をめざし、晴海ふ頭へ向かいます。まだまだ暗い中、朝日を目指して一生懸命歩き、到着し

アドワー牧師は、2008年にイラクのモスルにおいてカルデア典礼カトリック教会の司祭に叙任。2014年に難民としてカ

ナダに移住。ブリッティッシュ・コロンビアのサレーク教徒と聖公会信徒との交流が進展した。アドワー師は聖公会の聖職への召命を受け、識別の過程を経て2016年に聖公会にて堅信を受けた。

(2017年4月25日)

初の人女性主教、アメリカ聖公会
ジェニファー・バ

スカーヴィル・バロウズ牧師はインディアナポリス教区の第11代主教として按手を受け、初の人女性主教が誕生した。20年にわたりインディアナポリス教区を率いた第10代キャサリン・ウエイニツク主教は初の女性主教であり、バスカーヴィル・バロウズ師は女性主教の後任となった初めての女性主教ともなった。

(2017年5月2日)

死刑囚のためのヴィジル、主教座にて

アーカンソー州トリニティ主教座聖堂では、予定されている死刑執行に先立ち、ヴィジルを行う。「私たちの祈りは、死刑囚とその最愛の人々、死刑の判決を言い渡された行いの犠牲者とその最愛の人々、死刑を執行する職務を行う人々、そして私たち自身のために、希望と、強さと、憐れみのために捧げられます。」ヴィジルは沈黙の内にて執行の間まで主教座にて行われ、執行された場合、死刑廃絶を目指すグループのメンバーとともに知事公邸の前でも行われる。

(2017年4月19日)

次回夏号7月23日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア (三十一)

1. 分裂をもたらす

牧師「イエスは『分裂をもたらすために来た』と言われました。『父は息子と、母は娘と、嫁は姑と対立して分かれる (ルカ 12:49-53)』と、これはイエスの言葉の中でも特に解釈の難しい言葉です」

ある信徒「先生、私にはその言葉の意味がすごくよく分かります」

牧師「あなたは、この難解なイエスの言葉の意味がよく分かるというのですか」

ある信徒「ええ、身に染みてよく分かります。だってうちの家族はまったくその通りになっていますから」

2. 必ず間に合う

ある人「すみません、急いで〇〇教会まで行ってください。2時からの結婚式に出たいんです」

タクシーの運転手「えっ2時、それは無理ですよ。とても間に合いません、もう結婚式がはじまる時間ですよ」

ある人「それは大丈夫です、結婚式ははじまりません」

タクシーの運転手「どうしてですか」

ある人「その結婚式の司式をするのは私ですから」

3. ピザの斜塔?

信徒A「日本の教会はピザの斜塔みたいだね」

信徒B「どういうこと」

信徒A「傾いて倒れそうだけど、倒れないってこと」